



物質性を文化人類学する

ふるや よしあき
古谷 嘉章
九州大学教授

人間は物質世界に物質たる身体感覚を介して物質的に関与する存在であるのに、「物質性」(materiality)は、文化人類学において周辺化されてきた。近年、モノ(object)に注目する「物質文化」研究の再興が見られるが、その多くは、「物質性」については自明のものとして考察しない。本研究は、「物質性」について物性・感覚性・存在論の観点からラディカルに再考察することを通じて「物質性の人類学」を提案することをめざしている。

宇宙を構成するものななかで物質(matter)の割合は信じられないほど小さい。たった四パーセントほどである。あとは正体不明の暗黒エネルギーと暗黒物質が占める。そのわずかな物質を使い回して、わたしたちの世界はできている。地球上で生きるわたしたち人間もその一部である。この世界以外にわたしたちの居場所はない。もちろん「世界の外」というものを「考える」ことはできるが、それは、わたしたちが身を置ける場所ではない。

こうした類のこと、つまり物質や、物質世界たる自然界については、「自然科学における」というのが、文化人類学の基本的スタンスである。他方、物質から構成された「モノ」(object)に人間が付与している意味、要するに「文化」を明らかにすることが文化人類学の仕事というわけだ。そしてその際に、「物質性」は、所与のもの、いわば定数とみなされてきた。文化という図にとつての地と言ったら良いだろうか。

しかし、モノに人間がどのような意味を付与するのではなく、自らも物質である人間がどのように物質として物質世界を体験しているのかという問題は、文化人類学の守備範囲内、そこにまだまだ興味深い問題が潜んでいるのではないか。そう考えて、昨秋に共同研究「物質性の人類学(物性・感覚性・存在論を焦点として)」を開始し



水没と泥沼と日干しを繰り返す大地(アマゾンのマラジョー島)

た。人類学者だけでなく、考古学者や美術史学者にもご参加いただいている。

考古学、なかでも先史考古学が扱う資料は物質以外にない。しかも骨や石や土器など「固くて長く残るモノ」に偏っている。その作業の困難さは、わたしたちの生活がどれほど「柔らかくて長くは残らないもの」から成り立っているかを考えれば、すぐにわかる。わたしたちがなじんでいるモノは、いずれ腐敗したり風化したりして、解体・分解して別の物質に変ずる。モノは、物質が束の間まといっている姿にすぎない。万物は生流転のなかにある。それでも化石人骨にどんな具合に肉や皮がついていたのかは、我が身を見れば大体のところは想



砕けた後の「人生」が長い縄文土器(船橋市飛ノ台(とびのだい)史跡公園博物館)

像がつくが、もつと厄介な問題もある。同じ原石を割ってきたふたつの石器が、離れた遺跡から出土したとして、両者の関係は続いていたのかどうか。ここで、出土した大量の携帯電話とパソコンを前にして、文字資料に頼らずに現代社会を分析する任務を与えられた、未来の考古学者の困惑を想像してみよう。彼(女)は、それらの大量のモノが地球規模でつながるネットワークをなしていたことを発見できるだろうか。そもそも、現代社会の神経・血液ともいえる電気や磁気それ自体は、物的証拠を残さない。だとしたら同じ原石に由来するふたつの石器も、ひとつのモノでありつづけていたのかもしれないし、その存在の仕方は、わたしたち現代人の想像を超えるものかもしれない。

話がまた飛ぶが、世界中の教会にあるキ

リスト像は、単一の身体をもつキリストの「表象」つまり似姿だと考えられている。しかし中世の信者の振舞いなどから推定すると、物質たるキリスト像のすべてにキリストが遍く存在していたと考えるべきかもしれない。ありきたりの物質である葡萄酒や餅だつてキリストの血や肉に変ずるのだ。また信者は、聖母像や聖人像の足に触れたり接吻したりする。それ以外にも人間はさまざまなものに触れて働きかける。どうして触るのだろうか。そもそも人はなぜ触れることのできるモノを、しかもほかでもないその素材で作るのだろうか? 問いは尽きない。

物質というものについて、人類が何十年もかけて体験を通じて知り得たこと、そのすべてを集約するには、おそらく現代科学はまだ未熟である。科学が追いついてくるまでのあいだ、人びとの言うことに真摯に耳を傾けるのが文化人類学者の役割だ。蓄積されているさまざまな文化のデータに「物質性」まで届く糸を鉛直に垂らしてみたら、どんな獲物が釣れるだろうか? 例えば「マナ」の観念は、オセアニア社会の物質論なのではないか。日本語の「血のつながり」という表現の「血」とは、けがをすると出てくる赤い血

液に比喩をプラスしたもののいうより、血液とは別の物質なのかもしれない。「物質性」がわたしたちの生の基盤であることは間違いない。わたしがビルの屋上から飛ばうとすれば、重力で引張られて落下し、柔な身体は潰れて死ぬ。しかし、自然科学に任せっぱなしにせず、「物質性」の床板一枚ぐらいいは剥がして覗いてみてもよいのではないか。そんな思惑で共同研究を始め、いろいろ面白い発見がある。ご期待いただきたい。



粘土に手で触れて形を与える(ブラジル・アマゾン)

共同研究
「物質性の人類学(物性・感覚性・存在論を焦点として)」
代表: 古谷嘉章
2011年10月~2015年3月